旭川医科大学研究フォーラム 5(1) ：92～96，2004

旭川医科大学　回顧資料（６）　昭和53年度

第１期生78名が晴れて卒業

昭和53（1978）年の国内外の主要な出来事を振り返ってみよう。年明け早々インフルエンザが大流行し、３月中旬には患者が300万人に迫る勢いを見せた。同じ頃、東京の原宿では、派手な原色の服を着た若者、いわゆる「竹の子族」が日曜ごとに跳梁し、そのようすをマスコミがこぞって取り上げた。

５月20日、千葉県成田の新東京国際空港の開港式が行われた。同空港の建設をめぐっては、長期にわたって反対闘争が繰り返され、計画策定からじつに20余年を経ての開港であった。世界に目を転じると、５月23日には初の国連軍縮会議が開催され、８月12日には日中平和友好条約が調印された。こうして表面上は、国内においては保守・革新陣営、国外においては東西両陣営の緊張が緩和されていくかに見えた年であった。

しかし、日本と北朝鮮との関係に目を転じると、すでに前年の昭和52（1977）年には新潟県で横田めぐみさんが拉致されており、福井県で地村保志さんと濱本富貴恵さん、新潟県で蓮池薫さん、奥土祐木子さん、曽我ミヨシさん・ひとみさん母娘、鹿児島県で市川修一さん、増元るみ子さんが拉致されたのは、ほかならぬ、この昭和53年であった。

年の瀬の12月６日には、福田赳夫に代わって自民党総裁の座についた大平正芳が、内閣総理大臣に就任した。そのつど巨額の現金が乱れ飛ぶとうわさされてきた総裁選であったが、このとき初めて、全国の党員・党友による総裁予備選挙が導入された。そして、予備選で大平に大差を付けられた現職の福田が本選挙を辞退したため、大平がすんなりと総理・総裁の座についた。100万を超える多数の党員・党友の力で民主的に首相を選んだと自民党（とくに大平派）は自画自賛したが、当時のマスコミは、この予備選挙は同党の金権体質を末端の党員にまで拡散する結果となったとこぞって非難した。

さて、この年、わが旭川医科大学では、開学と同時に入学した学生たちが最終学年に進級し、附属病院および関連病院で臨床実習に励んだ。このように、同年は開学６年目にあたり、学生・教官・事務官・技官といったソフト面が一応すべて揃った記念すべき年であった。と同時に、ハード面、すなわち数々の施設・設備も飛躍的に充実していった年であった。たとえば、２月には附属図書館新営工事（1736㎡）が竣工した。３月には基礎臨床研究棟増築（760㎡）、本部管理棟増築（898㎡）、野外運動場管理施設新営（158㎡）、附属病院棟増築（119㎡）、看護婦宿舎増築（1708㎡）の各工事が完工した。４月には附属動物実験施設が設置され、10月には同施設増築およびドッグファーム新営の工事が完工した。

年が明けて昭和54（1979）年元旦、アメリカと中国が国交を回復した。３月26日にはイスラエルとエジプトがワシントンで平和条約に調印した。前年に引き続き、こうして表面上は、ますます世界の緊張緩和が加速されていくかに見えていた。

その調印式の２日前の３月24日、旭川医大では、開学時に入学した学生のうち78名（男子73名、女子５名）が、晴れて卒業の日を迎えた。彼らが入学したのは昭和48（1973）年９月で、志願者1685名、受験者1620名のなかから選りすぐられた100名（男子95名、女子５名）、そのうちの78名であった。彼らの学生生活は実質５年半弱というハードスケジュールであった。そのためか、最短で卒業にこぎつけたのは同期入学者の８割に満たなかった。病気や事故により学業半ばで亡くなった学生が３名もいた。数少ない女子学生５名は全員が最短で卒業した。

さて、今回は回顧資料として、広報誌「かぐらおか」第19号（昭和54年３月15日付）に掲載された第１回卒業生３名の感慨「クラブ活動を振り返って」「思い出すままに」「６年間の思い出」と、この年の第６学年の学年担当であった小野寺壮吉・内科学第一講座教授（当時）の祝辞「卒業生の諸君へ」を転載する。

頼るべき先輩がなく、日々の講義・実習はもちろん、クラブ活動・学生会活動・アルバイト、人間関係の構築など、どれをとってもすべてゼロからの暗中模索であった彼ら第１期生の学生生活が、いかに苦難に満ちたものであったか、これらの文章の端々からうかがい知ることができる。なお、卒業生の文章のほうは執筆者（男子２名、女子１名）の氏名を伏せ、内容の一部にもイニシャルにとどめた箇所がある。

（旭川医科大学　歴史・哲学　近藤　均）

クラブ活動を振り返って

「６年間を振り返って」との依頼でしたが、なにせ入学以来「三角大福」と４人もめまぐるしく総理大臣が変わり、下宿代・授業料なども４～５倍になってしまった今、当時の事を思い出すのは、卒業試験と同じぐらい頭の痛いことでした。学問的なことは、もう１人の執筆者のＡ君にお任せすることとし、私はクラブその他のことに触れてみたいと思います。周知の如く、廊下や体育館に吹き溜りのできる北門町の仮校舎に、我々ひ弱な１期生が入学してきたのですが、このような環境にもめげず、学生数と同じ数に近いクラブができてしまいました。体育館のガラスを割るのが活動の中心をなしていた野球部。天井裏に上がったボールを捜すのに時間を費した庭球部。針金の輪に雑布をぶら下げただけのゴールをもつバスケット部。雪かきのおじさんと張り合って真白になっていたスキー部。定期的に例会を開いていた桟敷文の会の前身。等々。唯一のまともな設備があった卓球部に１番人気があったのは、当然の成り行きでした。従ってその予算配分をめぐる真剣な討論といったら、椅子の数ばかり目立つ現在の総会の比ではありません。１日５時限と、小学校上級生並みの講義スケジュールがあったにもかかわらず、連日夜を徹しての話し合いが、ほぼ全員で続けられました。そうこうするうちに、初めての春を迎え、現在の校舎に移り、若々しい２期生が入学してきました。同時に、各クラブともめきめきと実力をつけ、一時、旭川体育医科大学かとささやかれたものです。中でも昭和30年代の男の子が多いバレー部の活躍は目を見張るものがあり、２回目の出場で東医体準優勝などは、並の新設大学ができることではありません。

私の属していたテニス部も、恐れを知らない者ばかりなので、練習を始めて３か月も経たないうちに、全国学生王座選手権などに参加するようになりましたが、なにせ大学の周囲は文字通りの荒野で、10㎞離れた近文市民コートしか練習する場所はありませんでした。日の短い旭川ですから、到着したら日没、ということが多々ありましたが、それにもめげず、近くのポンムという喫茶店の励ましもあり、真暗闇の中、雪の降る中練習を続けたものです。その成果が、ボールが見えなくなった夕暮時や、雨や風の日の試合に信じられないような力を発揮する旭川医大と評判になりました。（ごく内輪で、ですが。）

現在でこそ、野球場、サッカーラグビー場、体育館、テニスコートと、一応の設備は整っておりますが、使用する人数も雪だるま式に増加し、練習場の確保で、各キャプテンが頭を痛めなければいけないのは、今も昔も変わらないようです。確かに現在はどのクラブも人数が揃い、実力も以前の比ではありませんが、昔のような勢いに欠けるような気がするのは、現役を去ったものの杞憂でしょうか……。

文科系のクラブでは、積極的に各町村でフィールドワークを行ないながら、医療問題と取り組んでいた医療研究会。桟敷文の会も、結成して間もないうちから、同人誌を次々と発行し、我々を驚かせたものです。

ただ、当初より文の会の理論的な柱となって活躍していた村上君が、遠く沖縄の海で亡くなられたことは、残念としか言いようがありません。また、ボディビル部でひたすら訓練を重ねていた星君、マイクロコンピューターに興味を持っていた茜谷君が、重い病気でなくなり、共に卒業式を迎えられませんでした。改めて、お悔み申し上げます。……

以上拙ない文でしたが、昔の様子を知っていただければ、幸いと思います。このように、先輩もなく何も知らない１期生が作った基盤は、後輩の皆さんが、どんどん打ち壊していって、よりすばらしいものとするよう期待

しております。

最後に、私が中途で止めざるを得なかったものとして、旭川医大の校旗、シンボルマーク作製があります。6年間経って、未だその完成を見ないということは、寂しいことです。できるだけ早く、シンボルマークができるようお願いします。

思い出すままに

先日、ふとなつかしくなって、北門町にある旧校舎（昭和48年に入学して、1年生として半年近くをすごした校舎）をたずねたところ、跡形もなくなっているのに驚いた。聞けば、ぼくたちが出たあとに幼稚園の校舎として使用していたが、雪の重みで屋根が潰れてしまい、危険なので、とりこわしてしまったのだという。何か心さびしい思いがした。たしかに粗末な古い校舎ではあったけれども、ぼくたちの心の原点とでもいえるような、愛着を感じさせる校舎であった。

6年前国立3期という変則的入試が、10月におこなわれ、11月開校というあわただしさの中で旭川医大の第一歩が始まった。初めて知る旭川の冬の寒さの中、すきま風のはいる教室で、寒さにふるえながらオーバーを着て授業を聴いていたことを思い出す。入学当時はまだ何もわからず、生まれついてのスロースターターで、新しい環境への適応力に欠けるぼくは、難しい授業についていくのがやっとで、とまどうことが多かったが、あたかも堰を切った水が勢いよく流れてゆくかのように、クラブ活動や、学生会の設立などに自主的にとりくんでいく友人たちをみて、自分は本当にみんなについていけるのであろうかと、内心おおいに不安を抱いたものであった。

あれから6年が過ぎてもう卒業の年を迎えようとしている。いろんな事があった。楽しいことも、哀しいことも、にがい失敗も数限りなくある。それらの一つ一つは、あるいは私自身の歴史の頁の中にそっとしまっておけばいいことなのかもしれない。しかし多くの人との出会いのなかで、ささえられ励まされることの多かった自分をふりかえってみるのもまた意義のあることであろう。

2年生の後半から始まった解剖学実習によって、解剖学と教育熱心な先生方に心ひかれたぼくは、いつのまにか解剖学第1講座に出入りさせていただくようになった。特に何かを研究するということはなかったが、3回生の解剖学実習のとき、再びいっしょに御遺体を解剖させていただけたことを深く感謝している。また若くして逝かれた兼重達男先生の誠実な人柄に、そして冬の寒いさなかに後輩の実習のために旭川にこられて指導された浦良治先生のかざらない人柄に接し、深く感銘をうけたことを覚えている。そしてぼくたちの解剖学実習が、献体された方々の尊い御遺志や、白菊会の熱心な活動、また仲西先生を始めとするスタッフの方々の献身的な努力によって支えられていることを知り、あらためて深く感謝せずにはいられなかった。

やがて臨床の講義が始まるようになった頃、免疫学に興味をもつようになり、授業が終わったあととか、休みなどを利用して、病理学第2講座に出入りさせていただくようになった。正直な話、講座で研究されているテーマは難しくてぼくの理解力をはるかに超えており、実験を手伝うというよりは、失敗して足をひっぱるという方が多かったけれど、温かく指導していただいたことを深く感謝している。実験動物のかわいいマウスたちと友達になれたのも楽しい思い出である。先生方の毎日を見ていると、研究というものが決してはなやかなものでなく、日々の地道な実験の積み重ねであるとつよく感じたものであった。

また第1回と第2回の大学祭において多くの友人と協力して医学展をひらくことができた。学生の段階でどこまで医学を語り得るかという大きな不安はあったが、さいわいなことに多くの先生方の御指導をえて、市民の人たちと広く触れる機会がもてたことは貴重な経験であった。

こうして6年をふりかえってみるとき、学業半ばにして、あまりにも早く逝ってしまった星君、村上君、茜谷君のことが思い出される。3人ともみなそれぞれに、何かをいっしょうけんめいにやろうとしていた学友であっ

た。生と死が、これから何度も直面していかねばならない現実であることは頭の中でわかっていても、きのうまで机を並べていた学友が、今日はその姿を見ることができないことは、言葉では表現することのできない深い哀しみである。心から御冥福を祈りたい。

卒業したといっても、未熟な点が数多くあることは、自分が一番よく知っている。一人前になるには数多くの経験や失敗をつみかさねていくのだと思う。１期生として、大学や社会に貢献できるようになるには、まだ多くの時間がかかるのだろうが、あせらずにやっていきたいと思っている。

6年間の思い出

あっという間の６年間と云ってしまうことはできない年月でした。何しろ「番茶も出花」がお肌も曲ろうかという年になったのですから……。旭川に住み始めて１か月もたたないうちに、雪が降り始め、寒くなってくるし、本当に暮していけるのかしらー、と心細く思った日は遠く、今では北国の生活にどっぷりと慣れ親しんでいる自分に気付いたりしています。ここまで来るのにずい分と色々な人にお世話になりました。幸い周囲にいい人に恵まれ、おっちょこちょいの私がケガもせずに、大きな壁にもぶつからず来られたこと、多くの人にお礼を申し上げたい心境です。それに加えて北国の四季それぞれの風景は何にも増して忘れ難い事々です。水芭蕉の群落、カタクリの花の大群落、６月のライラック、大雪や十勝での高山植物の数々、北海道の人にとって当たり前の風景なのでしょうが私などにはすべてが新鮮な驚きでした。クマの肉のお刺身を食べた事など全く自慢に思っている位ですからー。(こんな風ですと、あまりにも観光的で、ミーハー人間なる事を暴露しているのでしょうか……。)

そして現実に戻って見る時、とにかく私達女性はその数があまりにも少い為か、こちらのＰＲ不足の為か、色々とその存在を無視され、おかげで（？）強くたくましくなったような気がしています。逆に云えば何だかオロオロしている中で、色々な先生方に相談しているうちに、本当に頼れる先生に巡りあえた事が、この６年間で一番の収穫だったと思えるのですが、ただ、私達が一期生として後に続く女子学生の方の為にという自覚を持って、道を開いてきたと云えることが何かあったかしらと考えると、ただ反省を残すのみです。あまりにも、そういう意味では余裕のない、とにかくすべてが最初ということで追われることばかりの日々であったという事も良きにつけ悪しきにつけふり返らざるを得ません。そして、その挙句に到達した事と云えば、何かあれば積極的に多くの先生方の門戸を叩いてみればー、という事です。そんな当たり前の事が、案外弱気な私にとっては、一大決心のように大変な事でしたが、やはり叩いてみてよかったと思えることのほうが多かったようです。

ただ１つ、これは私達女生徒が、本当に「痛み」として泣いた事。うわさです。それが根も葉もあったとしてもなかったとしても、あまりにも狭い閉鎖社会の中で（特に最初の頃）尾ひれがつけて流された情報は陰さんそのものであったと思います。長ずるにつれ顔の皮もすっかり厚くなり平気にもなりましたが、やはり痛かったし、今でも痛く残っています。お互いが手さぐりで色々と出した手がたまたま傷ついたからと云って、許さないなんて云ってはいられませんが、傷をいたわる優しさがほしかったというのはあまりにもわがままなのでしょうか。

泣いて笑った６年間。大学では、過保護に育てられたのかも…。でもそのおかげで rich な教えを受けたと誇れもしますし、逆に目先の事にふり回されすぎたとも云えます。でもそのすべてを accept して、やっぱり、いい学生生活を送れる事ができたと思います。本当に色々とお世話になった方々に、心よりのお礼の言葉をそえて、結びとしたいと思います。「本当にどうも長い間お世話になりました」と。

旭川医科大学研究フォーラム 5(1) ：92～96，2004

卒業生の諸君へ

学年担当となってこの２年間、１期生諸君と公私にわたって接触する機会が多かった。これから先は学年担当のときのように、学生諸君をかなり深く観察し、学習の到達度をはかり、個別に話し合うようなことは暫くないものと思われるし、まことに貴重な経験を重ねることができたことを喜ばしく思っている（まじめにつとめると、大変時間のとられる仕事で、そう度々はやっていられない)。

開学前の昭和47年秋から、一部の教官とともに本学のカリキュラム設定に関係してきた。その仕上げをしなければならないという気持から、１期生の最終段階の学年担当をさせてもらうことになった。学生諸君には、「命ぜられたのではなく、志願してなったのだから少々うるさいかもしれない。」などとも言い、大分煙たがられたのではあるまいか。

卒業生諸君は、１期生であるために余計な苦労を重ねた。同情は惜しまなかったつもりである。５年５か月で卒業の運びになったのは、近年あまり耳にしないことであるが、戦時中にはもっとひどいこともあった。医学部４年のところを３年で卒業したこともあったし、医学専門部のあるクラスは３年で仮卒業したという記憶もある。６年分を５年半で済ませることができたのも運命のいたずらであって、あるいは幸運といえるものかも知れない。綜合的な力に差はないものと信じている。それにしても、入学の頃の北門町の仮校舎はいかにもひどかった。あとで、雪の重みに堪えかねてつぶれたと聞いたが、われわれの使用していた頃はそれ程のこととも考えなかった。翌年、現在地に落ちついてからも、食堂はこれから、図書館は仮住まい、臨床の講義が始まっても附属病院は建築中という有様であった。昭和51年４月開院という予定で臨床カリキュラムを組んだのであるから、今はやりの“動機づけ”もなにもあったものではない。臨床実習は、患者数300の状態で始まり、しかもわが国最初の関連教育病院制度がこれに加わった。カリキュラムは学年進行にあわせて逐次実施されてきたのであるが、新しい試みには、やってみないと分らないところがあるものである。実際に、本学のカリキュラムは、１期、２期生に実施して、その後逐次手直しが行われてきている。１期生にとっては試行の連続であって、これもある意味では大そう気の毒なことであった。教官の立場からいっても、人は揃わない、実習設備は整わない、カリキュラムは毎年のように手直しされるという有様である。既設の大学とは異なり、先の見通しのおぼろであったことは、１期生諸君の最大の苦労の種であったに違いない。教官の方も、先のことはなかなか見当つけにくく、学生によく説明するどころの話ではなかった。

こういったハンディキャップを背負ってることについては、教官も随分気をつかった。仮校舎以来の“仲間意識”というものもあって、１期生には関心が深いのであるが、その結果、一部の人に甘えが出てきたように思われるのは、顧みて残念に思っている。世の中に出るとすぐ気付くことであるが、学生時代のようには行かない。お説教もないかわりに、面倒もみてくれないのである。自分の周りだけでなく、日本中を眺めて生きていってもらいたい。

学年担当としていつも思っていたことは、学生諸君に強くなってもらいたいということである。医師は一般に慎重で、どちらかといえば良い意味で保守的な人が多い。先輩と後輩のつながりも強いものである。１期生には先輩がいない。常に前途をきり開いて行かなければならない。そのためには、先ず、他の医学部出身者に伍してひけをとらないだけの学力と、先輩・同僚の助言をすなおに受け入れる謙虚さが必要である。いずれが乏しくても、医師としての適性に欠ける。

諸君は、仮校舎以来、大学の建設の進行を眺めながら、将来に希望を託して不便に堪えてきたのであるが、第１期工事の完成後間もなく卒業して大学を去ることになった。しかし、かなりの数の人は、引き続き母校にとどまって勉学を続けることになるものと思われる。諸君は、旭川医科大学の校風の下地を作ってきた筈であるし、同窓のリーダーとなるべく運命づけられている。大いに実力をのばして、活躍してもらいたい。

Commencement Ceremony は、終りの式でなく、社会に巣立つ式である。初心を忘れずに大成することを祈る次第である。